

まえがき

問題の所在と課題

日本に渡りし希ひの学成らず 食におはれトンネルを掘る

これは、一九六二年二月、国立療養所多磨全生園で発行されている機関誌『多磨』に掲載された、ある在日朝鮮人入所者¹の短歌である。学ぶ機会を得るため、植民地朝鮮から日本に渡ってきた彼を待ち受けていたのは、苛酷な労働であった。やがて彼はハンセン病を患い、療養所に隔離されることとなつた。

日本には現在、全国に一四ヵ所のハンセン病療養所（国立一三ヵ所、私立一ヵ所）がある。平均

〔1〕 現在、ハンセン病の病歴者を指す時に、「回復者」、「元患者」などという用語が用いられているが、本書ではそれぞれの時代に使われていた呼称を用いることにする。ただし、戦後になり特効薬が登場し、実際は治癒した入所者が多かつた時代においても運動の側面において当事者が自らを「患者」と呼んでいる点から、本書でも「在日朝鮮人ハンセン病患者」などの用語を用いていることをここで断つておきたい。

年齢が八五・五歳（二〇一八年五月時点）の入所者一三三三名（二〇一八年五月時点）の内、在日朝鮮人は五二名（二〇一八年十一月時点）を数える。全国の療養所にはこれまで、沖縄二園と奄美和光園（鹿児島県）を除く国立療養所一〇園と私立療養所三園（神山復生病院、待労院診療所、身延深敬病院）に在日朝鮮人が入所していた記録が残されている（入所者数の多かった三園の資料を文章末に掲載している）。

では、はたしていつ頃から朝鮮人は、日本のハンセン病療養所に入所しているのか。全生病院（現・多磨全生園）の年報によると、一九二二年に朝鮮人一名の入所記載があり、一九〇九年開設の一三年後にはすでに朝鮮人が入所していることがわかる。同じく一九〇九年開設の外島保養院（現・邑久光明園）、第四区療養所（現・大島青松園）、九州癩療養所（現・菊池恵楓園）でもそれぞれ一九二三年から一九二六年の間にすでに朝鮮人が収容されていたことが年報によつて確認できる（本書「資料」参照）。長島愛生園（岡山県）の療養所史である『隔絶の里程』によると、外国人患者（おもに朝鮮出身）は、開所の一九三一年に一五名だったのが、一九四八年には一〇七名にも上り、当時の全入所者の七・八%を占めたという。

邑久光明園入所者の具南順は、「私の周囲には多くの韓国人患者が見受けられました。そしてその事が私を一番驚かせました。私はこの療養所に百人に近い韓国人患者が居るなどとは夢にも思つていませんでした」^[2]と、多くの朝鮮人患者が入所していることに驚いている。同じ

療養所名	男	女	計
松丘保養園(青森県)	0	0	0
東北新生園(宮城県)	0	0	0
栗生楽泉園(群馬県)	4	0	4
多磨全生園(東京都)	5	9	14
駿河療養所(静岡県)	1	0	1
長島愛生園(岡山県)	10	10	20
邑久光明園(岡山県)	0	6	6
大島青松園(香川県)	0	0	0
菊池恵楓園(熊本県)	2	3	5
星塚敬愛園(鹿児島県)	1	1	2
計	23	29	52

■筆者調べ。

く邑久光明園入所者の許順子は朝鮮人多さに、「その点お友達が多く心強い」^[3]と感じ、先の具南順は「何か力強いものを感じますと共に、異郷の地で大きな病を養っている人の姿に、自分の事を忘れて涙が流れ来ました」^[4]と病気や療養生活への不安の中にも同胞がいたことに安堵している。他園においても、戦後、朝鮮人はますます増えた。一九六二年十一月三日発行の『在日朝鮮人ハンセン氏病患者同盟支部報』第五一号によると、一九六二年時点での全療養所の朝鮮人入所者数は七一六名であつ

〔2〕具南順「『人の女』『孤島』第一集、邑久光明園韓国人互助会、一九六一年、六四頁。
〔3〕許順子「長い時間の中で」『孤島』第二集、韓国人ハンセン氏病療養者の生活を守る会、一九六二年、四四頁。
〔4〕前掲、「人の女」、六四～六五頁。

たことがわかる。その後、減少していくが、その割合は一九七一年まで六パーセント前後を維持していたのである（一九六〇年以降の在日朝鮮人入所者数の資料も同じく文章末に掲載）^[5]。

一般社会に比べ、ハンセン病療養所における朝鮮人入所者数の割合は高かつた。なぜ、これほど多くの朝鮮人が日本のハンセン病療養所に入所しているのか。朝鮮人の入所経緯について、先に紹介した『隔絶の里程』には次のように記されている。

戦前、朝鮮出身者のほとんどは労務者として故国を離れた人々であり、強制連行されてきた者も多い。なかには家族も知らぬうちに田んぼから拉致され、釜山港から麻縄で数珠つなぎされてきた者もいた。^[6]

「労務者」として苛酷な労働を強いられた人びとがハンセン病に限らず、病にたおれたのは想像に難くない。また、男性だけではなく、女性も日本で厳しい生活を余儀なくされる中で、療養所に入所することになった。邑久光明園入所者の金玉先是自らと同じ朝鮮人入所者に対し、「生活に追われて日本へ渡つて来て、充分な生活を築くいとまもないままに、真っ黒な絶望の世界へ投げ込まれた」^[7]と証言している。

ハンセン病は、らい菌による慢性の感染症であるが、その感染や発病には生活環境が大きく

影響する。在日朝鮮人のハンセン病患者が多かつた理由について、日本近現代史研究者の山田昭次は、「日本帝国主義の過酷な収奪」によって、朝鮮民衆の生活が「低く押し下げられていたから」だと指摘する^[8]。このことからも、ハンセン病療養所における在日朝鮮人の存在理由が、日本による朝鮮の植民地支配によるものであつたことがわかる。

歴史学における在日朝鮮人ハンセン病患者・回復者についての研究は、前に紹介した立教大学・山田昭次ゼミナールによる多磨全生園の在日朝鮮人入所者の聞き取り集『生きぬいた証に』の他、金永子による「ハンセン病療養所における在日朝鮮人の闘い——「互助会」（多磨全生園）の活動を中心」等にとどまる。しかしその後、『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』（公益財団法人日弁連法務研究財団、一九九〇年）や『近現代日本ハンセン病問題資料集成』（不二出版、一九九〇年）の刊行などにより、資料に基づいた実態が徐々に明らかになりつつある。長年にわたりハンセン病患者・回復者を縛り続けてきた「らい予防法」が一九九六年に廃止

〔5〕 金永子「ハンセン病療養所における在日朝鮮人の闘い——「互助会」（多磨全生園）の活動を中心に」『四国学院大学論集』第一一二号、第一一二号合冊、二〇〇三年十二月、一一〇頁。

〔6〕 長島愛生園入園者自治会『隔絶の里程』日本文教出版、一九八二年、一五六頁。

〔7〕 金玉先「収容所で」『孤島』第一集、一二七頁。

〔8〕 立教大学史学科山田ゼミナール『生きぬいた証に』緑蔭書房、一九八九年、八頁。